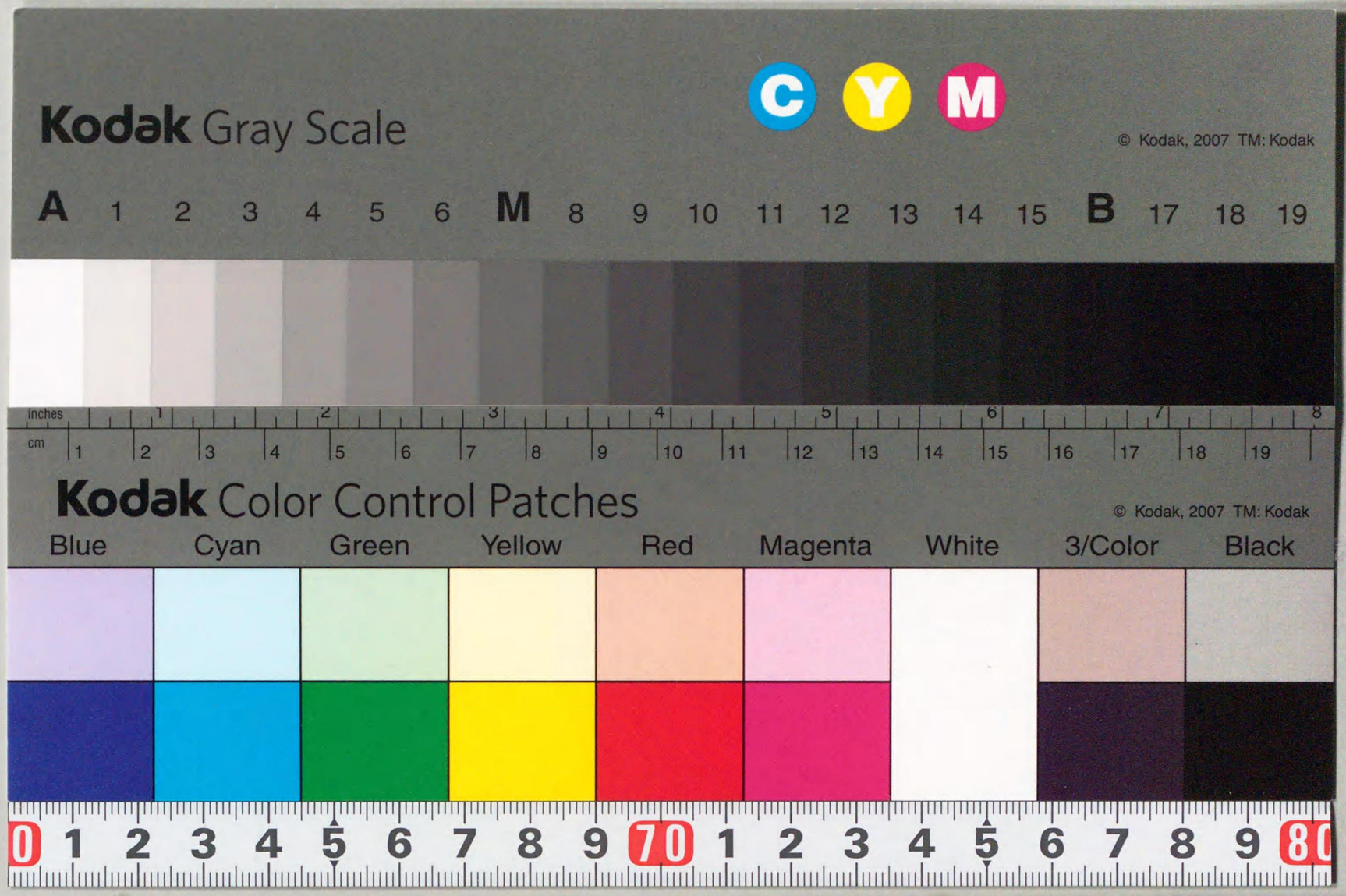


11
25
86

Y994-J8267
1200801182769

書圖局許特
342
3

教典業作舞

川 舞八業

大正八年七月十八日
第382號
特許局圖書館

農業全書卷三目錄

菜之類十六種

蘿蔔 才一
芥 才五
菜瓜 才九
西瓜 才三
南瓜 才四
匏 才五
絲瓜 才六
蕪菁 才二
胡蘿蔔 才六
越瓜 才十
黃瓜 才十一
冬瓜 才十二
茄 才七
甜瓜 才八
菘 才三
油菜 才四

特許局圖書
函 3
架 3
號 5
國
號 735
部 1
冊 1
Y994
J8267
國立國會圖書館藏書
I種
W
1200801182769

農業全書巻三

菜之類

蘿蔔 才一

大根 四季ともに植る物ゆゑ。ごとの名を示す。各弁りさまざまの説有。秋乃始より苗を宮ゝとす。これもまねく作る物なりいつごとも尾張。心城。薩大坂ごと称て呼べし。招ふくに来あひくさくばは

うすく多く苴く。中實して脆く莖付細く
紫黍なるを尋ひて作るべし。稻粗く赤細こ
て内原く莖付れ而ふこと
ようこぬた稼なり○みそ
かうのおにする。粗もち牙脫をおのく又餅大粗
大粗多くあり又播州はかた大粗とく彼地なる
おなり。此外尚多品ありて各
くべし○粳子となこめ。黍月の初め大粗

納きやすくふくらかうびやをひ
しつて。紫いろまくをとく。一夜も用ゐ尚てお
もるびるると睡仕ふくく切。犯地おう
ば一夜ゐ一年つうへをぬ。膚地あら成。
おく養ふをうぎ。まこる時睦の中に紫ら枝附
て繩をけり。面風よたをれぬ粗こをえべしこるまへ
ておおしこうゆる時お日うり
付ふく雜をよいさまずこ
ぬり九分れ実るとんる時刈とく樹の粗こをく

うへ又わらの下にうくさるゝ程おしてとゞめ
て上へ又刈こくたの海泥川ふとをとりて六七日と漬をきてよく
ふみとをしてもみこくるもうすくかごとくそれぞま
きくほし出さるものなり又お月扱てうけをき。
正月こくてこゝ稼ともちるもみこうすくりのなり○
うゆの地のやうな大抵ハ細秋沙地ニ宜しくてやうう
なる深き細沙地を求一ぬむものなりこゝこ
ばの地又ハ黒土赤土の肥くる細沙ハ尤よし
の不大抵乃性ときこのなるう。
ふ月いうわも深くうち洗養をふくうち干付

をきそをなくく軽返しかきこかし。地ごゝもし
て六月六日た稼をおもべくとうくとうり植もやくこ稲の
の根養を打のなく付植くく地をこかして苅べし。乃土
刈中に苅を上向よくし。七夕ハ
刈を下向こゝ地ようう重よくあ
るものまきハ苅必一倫よい宝めてゝ。早るそるハ抓
ふくくなりとゞもの味ようくごと。中野畠か
とのおゝ麦間おこゝろゆるのかおゝよごくくいくな
も多しくこかし手を苅ふ八刈のおゝ大抵納
刈なり○晴乃養さ宝ふくく横苅をこゝり。

油糟粉。藁ちがら紙多く刻ひとく掛藁ちがら。庭藁
よく乾るは藁ちがらよくかれ色ーたるも
古わらをよく打くだきふるひ去るおなり。麻殻にて苅る尚
よし。九斤麻。十斤藨。籾ともに水にひたしおくこと。そのまゝ
こるーこ〳〵ゆるめおくうち大抵籾一升へ灰一
大抵籾を十重も斤せいぜい籾よし六合を中分とすべし。
よく分ちのち。麻九重藨九重斤せい藨よく乾るし。
但籾田をくてぶかとうるかくも苦心。
さて二葉二葉乃ばらり〇粒
問ひて久しくなる程中ふくすべし。其一俵の籾より。
二分二三ふある強うけり。但大きさをもしるべし。
くるべく〇久しくる程よし。ふくるは泥おもく
ぼこ。庭よし上を泥おもくおくるーこうにしめ置てま
くべき十日もおけば藁をうち干付、かきこかしうるかひ
をひきく畦作りて。苗うるかひろくへ。畦
あをうくぎをかき水ひいるとおくく、かきこるーこんぎよ
てをちこしに苗よくて。移植る。焼土あがたて合せ。
苗うるもの〳〵ちこ苗よりくかまてうる藁
とおかひをよくとおかひを指し厚さ三おひ重て苗

二月二葉乃ころより早せんをそくきゝ中うちのくらいてぷとるにほどくるまあいだハうべ抽きさうぶきは小便ありあるときまぜくくうれ。葉ゝ多とのひ晴日いなく中と並くるまくさあざうりて葉の赤くなるとをきさ去由ゆゑくゝ風とへ葉三日すてものびるよう。多養小便とうん合そくくぞ。かくうごくくをれば実りた虫も分ぬもうなり。多虫分ときらば若葉と名くたくきあにいせ、さ庭とお合をそ。まべ第一小て日中にうめべし。必虫死るもれなりまた。てう〳〵三葉ととを小林ともう云三月向きさ花さく葉あり。よ上がりそいあ色が葉と云ふ。心葉ハ葉をせんじそうべ一の人山葉をせんじ。牛ろまでに乱れつきてるをはひても抜めくくめかりの人ハれて山葉ハ試ふべしわるべ虫死していゆることのなう。〇云大根ハ二月六月まで。毎月上旬に前て二十日ま大根ハ二月六月まで。毎月上旬に前て二十日ま

ていお根葉ととにさうくぱ中浸うまさおなうぷたねの紙計とれさめ亜て沢米にそ一ー。〇夏大根ハおよ一粒なう。粒ととお抜作ぶべまぞ。ろう行神うにぶくこと。二三尺も厄〇又大蕪菁と作う法。地と深く掘耕ー。二三尺も厄まぞ。ろう行神うにぶくこと。葉とうらさ〳〵ときうをと。大さうう株乃さ中にお。こひ三

尺餘なるしびの為も一尺餘にして筋を直ぐなり。色白
尺餘の根横筋なく生ずべし。右のつくりやうかちたる穴
の中なる糞壌よくかきまぜて油かすを土に合せよう
糞と土とを合せよくこなしてよく穂に埋みて穴の中
はよくふかく丸く色よくなりとみびて一穴に二三粒ばかりまき上
に灰をおほひおきてかれて置べし。生ぞろひの後よく手入
間ひき、但し四寸中に一本を置、性のつよきをよくやしなふべき故
立をき、又ひまびまをさらへ、早せば水をそゝぐべし。霜さむ
さときハすぎ、小麦などよくそだてかやうにかきさらし根よりかづく
土をよせ、おほく其の根をよく入として堀月極べし。

其根を穴より引ぬきて大きにしてかくのごとく
まろく、味もよし。此種を播きて見れば、肥地にて
作りて一へ播よしとはせず、又山城にて太根と作り、其
太きハ樽のごとく、長さ二三尺もあるべし。其さま十枝にて
ぶどうあり。又唐の書にハ、其長さ二三十枝の物ありと
なん。又太根と臘月正月の頃切て其畦に植て
冬する事を避て深くうへ、葉蒸とつねのごとくすれば、
甚ふくされてよく盛りに時よく料理よき物
となし。又太根と芋の類ハ、又ハ多く
ちぬれたる時ハ手を労するず。必ず葉に虫と生ずる事

大根のくねよくうごきをそ手ばやくおろしかけにたれをひとつゆ
多の油にて一盃煮て戻よく合せよく煎りかもしてもせたる
○千大根十六の末ぢまりだ寒き氣候の事一把とくり善せのそれの下の残葉
めをそぎ洗ひ髭をそぎ二把とくり善せのそれの下の残葉
のねまたなかけく千しよ小本とわさびおろし手をも
うすこびく手たる時めをなやしとくく千二三
てかびのねをぬぐまぐ千相うて手
なくおでくくそ好ほうくそてこねまぜ
包こ温気をおさあ盃わくもり千相うて手
童にへをくべしよ又紀千たる時盤乃よにてをしくそ
ちぢくおさあそくもゆうけずし
て味うしお好みのうに庖方へ五杯しおべて耳汁
ものそれわうてゆ平
ばそのうちるるしよ初そのこう
め味噌よく漬そ卵煮かうて何よ賓飯よ家
ふとゆの盃そのさ地乃
作りて招楽そもて煮そ雪乃平。皆ぞ女子へ勇て。
外ばんのさいとかしそ飢そもゆうとおうそ伝家

菜蔬多きゆゑにや紙作りの
ごとくの作るべし ○一名小大根
つくり漬物とすべし ○俗に
根菜ともいふ嵐の尾ざとし
又千大根のごとし中三十日の
つくり故名なり 才二
芝菁又蕪菁ともいふ
蒲萄菜ともいふ
春三月の種かくべし
のさいごろくらの土塀

蕪菁

てこ必ずとるべきなり
なり多くて油分ありて大根よりは
うゆうけつのあり家の油かきさかべて用ゆ
とぬむねなるゆゑ加賀の
とところどころに作り肥熟
泥おほくこやしたる地を好む
大根のごとく地を眠し
ようこやしてもくるがよし ○
おかのりにてもうすくまべし
をり付るなり ○

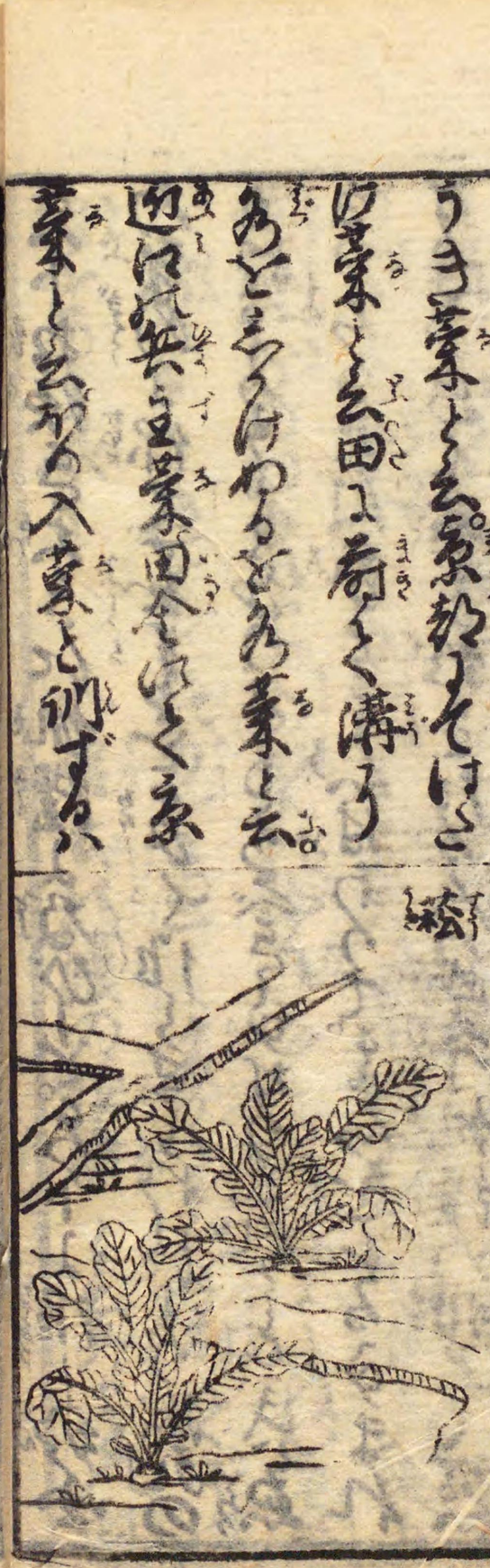
大きにわるし。苗のねもぐさりたる時は
それとも見分るがひさしからず芽
ざしはやくわて植べし。半うちをくべきなり
重しおそく死をこころびくさりやすし。
まへ月初旬ころより。早く苅こみくらいへ
かこひをくべし。然ときは味ようして俗に
あしばおくへよく苅べし。根葉ともにやわらかに
なりたるおのうへ泥とうくるべし。重ねうるし熟して
ほどうるかひとおてこまかに苅べし。苅ほして
なくば睡ようあとそぐぎくさく苅べし。おほうるかひそ

おくまるほどうる〳〵ほどおさめそのうへ根ごも
うへあしくふまくうてよし。油をとるには油菜よりうずの
ごとくに泥をうく肥しを苗をとりてよし。秋よ
さくしてねーうのわぐをうへよく多くうべし。付
よき所にてうりて油をとるには油菜よりうずの如
よろこばるゝ人多き町をさがしてそ苗うへよし。
うくしねぐをえ葉とりて吸ひ物あへ物にすべし。
ねと作りうるよう利分多し。○抽ひがぶ菜共
他の菜にて紛れなく功能ありて葉ものこるものとたゝ

よろしく菜の事一ハ飢饉の時穀とまじへて煮て食し
てハ甚だ益あり他の菜ハ久しく食すれバ害多くして
人のためになりがたくなるものなれどもしかれバいう糧多く
しく食しても病を生ぜず人の為におほいなるかし糧
こゝろ味穀倉によく是も用ゆるべきゆへとなりぬまし尤
て穀を加へて食すれバ凶年と謂ふすけものなし元
の書に菽麦くろし菜の早ハ蝗の災風雨の災も
水旱蝗のおのおのまぬかるゝ菜ハ独まぬかるとて多
く植へおくべし是じぐれかどもしいかに飢とも
難をのがるべし ○又唐土の漢の桓帝と云人の時

天下お饑ろ大きに飢饉に及びしとき天下に詔して郡国
のちかぶしに仰て蕪菁を多く作らせけり饑死の
民おほかりしに是のみなるもかくべきにてなれども民ハ蕪
をもちひて是ば飢をしのぎしはありて終にさる事なれ
ばあれば豆をも救ひしたる人あり凶年飢饉の兆見しかバ
と早く蒔くべきなり是秋の末にても蒔べし
其の外ハ年もしげくさる人ハ根をくふべしやす
蕪菁ハ時よりの料理にもなりて用にあたれとも独も利
にもせよ作りても悪しかる ○又菜園よりして煮て
食とうきにたち城にて料理もし漬にもして貯

紙よく合ひてよく乾くあかなどの
文をもちて印ぶとそのあと拓紙よく
にしてすみうつりよくそのうへに
けづるべし　又のみとおもくおさへ刷ときは
うすくべし



松

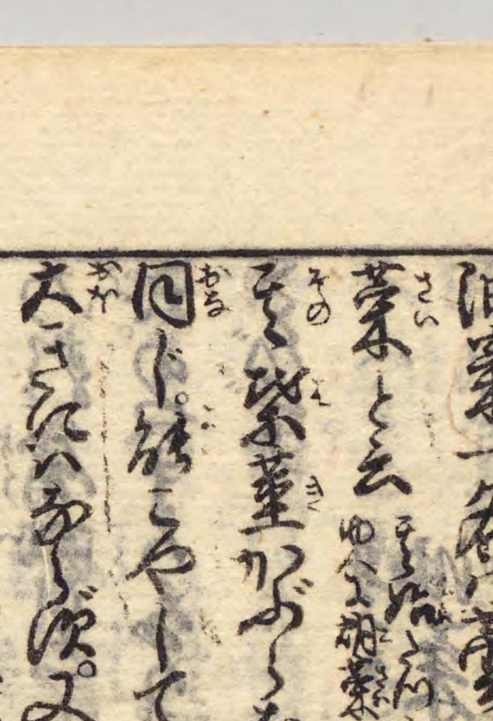
芽　春三月

うき菜　こも菜　そばなともいふ
菜　こも田に苅　よく湯
あとこれをゆでて水にさらし
辺にて菜と云
菜　こもの入菜と刻ずる

假名　ほとけのざ　大根の
へ拓共にすき青にて同じ
ずれども味せんよりうまさ
ろをひとつ　拓本をとるあつぶさきりの
るまめると船をる人拓と食すべし
のまま煮てもよし大根と同じく油
云のやうにつくる又拓の実は油とりて
さぐず

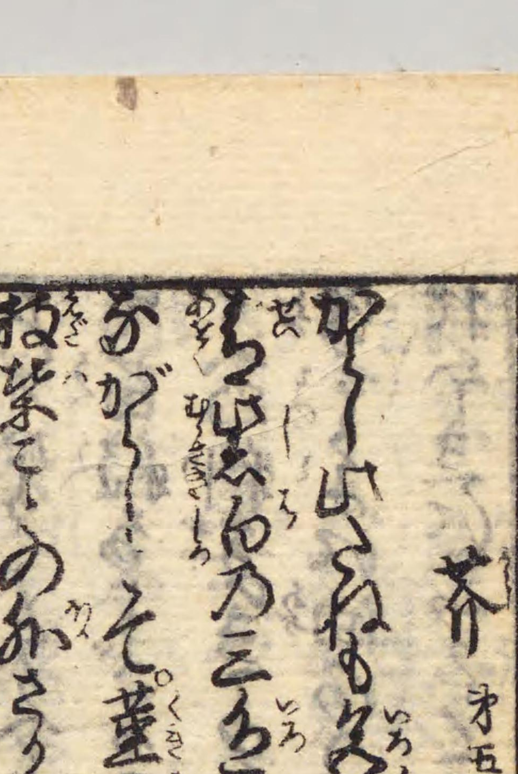
油菜　春四

油菜一名八菜又胡菜ともいふ又蕓薹ともいふ
その菜葉を採菜とそなりその菜葉かぶ〳〵かのみにて同じ
大きさにあつぶつをほどおきこれをも田圃よりて多く作る三月菜の花とひ
油を搾りて利多きゆへ菜畑らさかり〳〵廣き田野よりて多く作る
その実うまよりえらびて納置きて藍
をおるおもと作るよし俗ういふ


油菜

ぬわぐ川れるの一名なりつぐひ。汐のこるゐと一同う仕
四月のつかつきまき春とおゐ。油菜を作るハ一川のくる等
うまだよし地面にうるまきを三ケ一ハ油菜を作る里ゝ
ふつ見ると作る法かり〳〵かよ同じ。但秋よろ地をこらへ。
裏ゝて苗をもつて四千九百の別の田畠よ植ゑ一粒
九つなりくさうくてる多のゐ。さればと若人ひとりよくよく
て苗植るの〳〵ざろへかゐゐ〳〵ゐ。されども蔵
えの利多のきてもとうへまろべし。○かぶらおのもと。
名をまるに油のつさればと油菜ハ菜くしてる
れやきてもろ〳〵

芥 才五


芥

からしなもろくあり。先
ちいさきかぶのごとくなる
かがら。そ。葉ことごとく
ねぢけ葉このみさうに茶れ黄
きなる芭蕉ばでごとく○うら
返し。紙こより落く茶こば
おさう棄あとゆくうきこ
睡ひり。横ぬを切そろ名一尺ばかりにして一束づつ
とり。灰棄そのの棄ゆひりねとうくた
みうま茶こいきく洗ひ乾し多氣なりて
ともに白こ三字ゆもしおくく
よし食すべし。三月若家
べし。ふたらをねちをく漬こうに
かくとうんこもうべくうち
ところ時刈干てりこゑべし
きにうずゆて料理よ
山ことにきこが実多くて味
刈又二月若葉をうでて
名かれる時も。色なくさう

人数多くて家内ばかりにても菜は業にて用ゐるべし。
油とすべし。是も油利ありて作るべし。

胡蘿蔔　和名加良人参

胡蘿蔔

○二月に種をまく。畑よく耕し畝を立て中に
浅き溝をつくり種をまき薄く土をかけ
きまきてよくこなして根の葉
ざるほどとりてよし。其のまゝ置ては根
葉ともに悪し。

○胡蘿蔔の大根よ
り早くうゆるなり。いつ種も同じくかけ
一所にうゑべし。糞を多くほどこし
ぬれば根悪し。

○二月に種をまきて五月
に取るを早生とす。六月に種をまきて
八月に取るを中生とす。七月に種をまきて
九月に取るを晩生とす。

かうごとぴげもにうりてやうの季うりにして牙脇うらぶ ○なすびをおしまて水三日ほどよく前くまをへとをあらひくきをさりてなすびをいれてきいでき招大きさりぬ。ひねたるびりにしてくかいきそでおろしきをぬすず。常に晒の本おうるかひろうそうりぬ。いり粉も二分くらいく。一ぱいにつき油粉を入まぜ大さりこれ大根ざくぐらいにきりてもよく味性もよ入れおなり。菜園にいかくべうらぶ。他にんじんいも等をとおなじくしてすくそでそれをきるとくらぶ入をとをまく前おなり

なすび 才七

なすびは紫白まるの三文あり。又丸きのうり長きあり。

小円丸くしてなすなるを仮山円丸くしてなすなるを仮ふべし。紺おとりて丸きは味甘くわりふかして肉実しざりにとけてくるものかしき用ゆべし。 ○又もきは那よりて二番よりてきたるをなりてのうりきよれを納るに九月よく熟したる

もりくるをみてよくひかへ流くるをゆりそらしまくさくさくと乾しさくとすの籾をよくたる時収めまべーし丸なげこみれば大きなる云かりもし淫ひゆりそこ底よく合せ苗をうゑそつまく苗なりて二月よりそこめきすの下にゆるとさて苗時めるの湯にひたしそこよくまとひそこ底よく合せ苗をうゑそつまくうらくかしてうらくくるやし倒りてこのうらくくるやし倒りてこの横三尺おきりて正月雪きえて苗ゆべしそのよう。

二月の中とゆくそ苗なるもよくとともうくうくさ三月の初旬をひて苗さるか二月苗さるにをくうくすそ卑しとさ苗一本ゆきまむちそ肥さる細太にて交ぜゆるの方ちくをさこあらくる日いれ日よくそ家の内まくさるとそ苗湯くくなりくはそくさえして苗泥ようつそ下ちう晒一晒よくさるにて苗さくもやきさまをまえて苗もこぐるくそ泥やさ泥ってか

きるやうしやくぢくらいくぼくの所へ厩糞と肥土とを合せ積
みおかひ掛の厚さ五七寸ばかりくづなをおろしその
まゝとおかひ置。翌乃至おかひをのけ四尺おきに溝
を小夜とをかし合せ引ならべ厩糞を合せてくやし入てきこう
みくぢ日中に小苗植ようかくうねだりもの
乃至るんこうくに苗かぶるくらいすうへ土
かとなるやうにむ雲うなる肥地やーさ内をの肥地
やうよくするおなり○さくう
るに掛しうねにて月よう
つーうゆうの早春をとるを廣く苗ぢく本うちを細
くしとさるに一なづーうゆびき不ら完の源さゝ六す

やだりやさ土を一畝へ厩糞を少ゝ
さくぢさくに苗植ふとるおまう
焼ごろまくに他の糞土よりて
うるひまくても。畝ごようう
けべし掛むるるし。赤い掛しうゆ
も苗ようくふとうぢよのせいはよ
くあり付くさうくやをおあり
き苗をいそがうようくうて
るとべくに苗をうゆうに
うくに根のされ掛しうゆを

そくざにかりおくべし。さてわらくづにてつゝみてお
きつゝ遣すべし ◯ 又うゆる事。茄子をうゆる事ハ麦
を蒔時よりも。先をよく純土をこしらへてたてのまゝ
びハ一尺二三寸。横の間ハ一筋ハ二尺ばかり。一筋ハ二尺
程にしてよく土糞をもちひ時々広さ筋を取てうへせ
ならべハ土をかへずして溝をつけ。広さもちだらけのよ
うに土をかいよせ。中をこしらへ中ハ小溝と細くそうる
おひをよくたもち。又ハ畫水をそゝぐにもよし。ぞよりは
ぶかく入れたるにおひても猶根の土広く厚くなれば
根よくもびこり風雨の時たふれず。されども根ハ同

風さらへずしてよくさゝへあがりて。実多くなる
物なり　但茄子一つ二つなりまでハ。おそくして根ヲ糞だすものとハ。かの亞の糞と小便をうひくゝくべし。小便ハ又日ヲ一度かくべし。又茄子二つ三つもとる時ハよく大きにありて後むよりでもくよろこぶの事なり。おもくなるべし。小便ハ秋までもかけ
茄子ただこえおほく糞ひ
ろくさうる事。これ実をさかりの時ハいづれも木の動くると塩
ふゆへ培よる事を厚くし。又ハ熟くすべし ◯ 又麦をまき
むと菜園などにうゆる事ハ。細畠の中などにてハ晩なる茄子の苗
のあざきハ此所を紙にくゝるてうゆべし。又おかひハふさぎ
葉桐の葉などでもおほひおかひへくよし。むこも少なくり
ておほふハ上もなく宜し。霜よかれで早にうへてもよし
まど茄子ハ肥るとてあしきうすをさゆへ。夜中ハよく夜

づゝを秋は成てを蕪多くを三度七月ごろをこゝたびくそく
くべし。ちうしんがまのをくさうへ〇又云蔔と栘
ういうゆゑ時ごろ根乃ぜんをおかへくくうくこ付おなり。ぷ
にが去にゆゑくく痛ごろかあるごといおづりづく切てうへ。
くろきごろん染お出くぷようくありけるとうくく根乃
まれとかさくがめ弱てもも油糟うくも入くたとおか
ひ重ふとるふ陰くく陰ごろ入べしぷされくも二ふ乃
蕪の求めおわがくく死を紙包かり務蕪と入を上

に漬蕪弱くかくべしぷ硫黄を粉うて根のときたが
入べしぷくるうくふくく味も嘗にまさるべし。名一なよ
豆粒かど重とあれども薄柔一服も入しを強るよう者
去は死せう（）苏子ゆき時つ於重ふあへば根のたれをとう
きよくく葉をけりぜ痛むありぷうゆる時大ふるべ
うのべうごと首を折て沼根の鳥りれたをさくれうごと
得て重べしぷ切出れんとも重るべし〇又苏子二重う
ふるうの冬の中うのべき扇の中にてぐ二尺に埋ぷ
ぬさ一尺空すて完をかりぷ中に牛る蕪ぞ取行よ
てもこやふかべきまを入ぷをよりたを一を

かけそよふうて又落葉をおほひおもくへだてをれよふりつゝそうと完の如
く村と松の雲の間のよふにするとよし。
一畠に二ばかりうのまびきよりおくれぬやうにつゝ植ますよさうへぞ
ろ実り結れてたゞきうく。
うゆうざあり。土地乃こくなきほかり。芋ともかくのごとくしてよ
ゆく乳とこらこめそくんにつよいつゝ土地よ
ひおつゝくへくの如く昇して病どこつよいきろ

なども亦して土の乳勢ーくなるべし。芋をおろ
ろあゝと云ふこゝろへやり。雲も必しも生ぜざるさにあ
らと。地の実。空ら小潦をく亦にもわざと云ふ如き
陽気発生をるかにようくさうんにして。生和ることよ
つゝくうくさうゆるとなり。○苗ある代をを苗ごま
き地にてをまくうに付ふしてよ。遠い結のもへとすればぐ
ずくするゆへにようくもあれども亦しそ
苗にてうゆるおいおすびよかごろごと苗うへ必ろ
へやすく利分も結わりやうへとるわざうへ付ごしと
るかいとをへくも猶不のすへも遠ひ植ほのを

ぢで水入あつてそうくくこそぐつて大小ありてぴ
へとうくしくくもぴねをつぐ同く大さに成てとう
苗を紙に包み土中に埋れぢるを掘出して抱おひさ
るを掘れば則掘り得る苗を花かりて土ともに移
らんきをして植置也。大小もなくひとく栄るにこゞ

冬瓜 一名白瓜 一名水芝瓜 一名地芝瓜 一名枕瓜 一名蔓瓜 一名水瓜 一名濕瓜 一名東瓜 一名水冬瓜 一名白冬瓜 一名地瓜 一名水地瓜 一名白地瓜 一名水白瓜 一名白水瓜 一名水白地瓜 一名白水地瓜

冬瓜之類 甜瓜 菜瓜 越瓜 胡瓜 絲瓜 蛇瓜 瓠瓜 壺瓜 絲瓜

瓜は大小あり。ぶさくの甘きも大きなるは淡し。薄瓜甘く

と云。瓠瓜といふ。夜月実を残の黄瓜をる味さう器
実をさり渇さ我やめ酒毒と解を○将よとねめ
実のはさりし熟瓜の味落れるをあときさを切
さりの中程の実だけをとりて細く脆くよく煮
あつめをそてぬゆるさに入ほく洗ひ。粉ら末かる
く成るる時沸るをさりて布の袋う絞よ入れさめ実べ
ねもたにうゆるぴなり又い未るれさねを用れぴ必
た稀がりをるめるわぐ中をりの味よく形よさをも
ちゆべしさ其方のよい瓜細ーなれものよハゆるこ曲

つまく細し○又粉をねりて餅さとをつくりめうがまぜて
揉てねうとねりを殺さくおさえる把れものゝ上に布を敷ねりかいかようにつまく形を
さとをつくりてやうくやうなるかようにてこうくやうなるかようにて
さうしてもよし味よくしてよし○又粉をねりて餅さとをつくりてこうくやうなるかようにて
を狩しもちこまし

○又ぐ粉のつまさ大豆を二三粒ずくとくべし。
ぬの性によりさ把さくまぜをわさようさ豆
のねりはさまさ把がまぜおつわくまるかくは
もるなり也把生じて三四粒ずく何大豆をばつさる
べし。そし又料理するねりのさまさくぜとなるねりの○さ
おてかしんぷ紫ねる時ぬすをくおるぶ
く完をかし把涼さ二すねりさ中へ混煮のよく煎
ようさ一面へ半ねさをねやぐくたをおひひ又七日こ
ろをまくたれよりぷをのけく完を廣く

嚢と入たるごとくしぼるなり。又ごまの油
のごとくすべし。先かくのごとくして
るを半分とをるなり。よきあぶらは二嚢まで八桶嚢と用
ひ。その残りは四ツとれ。かくのごとくまわし。油糟とへべし。かくのご
らくもるなり。二三回かれば油の味淡くなりてよろしからず。
回して嚢を入るよし。かくのごとくして油糟をかきとるなり。
とし。六日もうそく捨め合ひんひをるものなり。もし粕の
よしかくれたる。却て痛むなり。○さきに油
ゆへ。三斗宛の時もこれにつとめ。もしくのごとくせざれば
らびざるくの如くなりて出るなり。先ねごとくすべ
るなり。その外又ごまの油糟を搗ち時。名さきを搗ちべし。
いなれば。ごまの一斗づゝにいるこれへ
ふらぬ物あり。ねごとくして二つぶ
てよさきをとるもの。もし一斗づゝにいるこれのなり。
ちるれば出るをよく初めのごとくさ
ゆるよし。たとひ油なりとも切く捨べ。
菜を付るの口よりつくべし。先ねごとく
出つるよし。たとひ油なりとも切く捨べ。
ても八一回又一なづゝ。ごまを入べし。

どうぞ火を近くよりて二ながら寝玉へ一ながら
よに二なきよろこびもの哉ト
むとくてくどにるつくしそうもなくねごとたくさ
るおなりうちげくもつれあひぬねどいつねそへ
もくもうきんるぬおなりうちげくもつれあひぬねどいつねそへ
く痛むおれどにるつくしそうもなくねごとたくさ
分くろいんのうりよく疲おかくゝ十分熟一ぬるなりん
なくうりくありれりうきんなぬねおり○えつるま
まくづりとるおやまをとにねべしゝゆくづり

つもぐれ睡おれどゝゝゝれとくゝ中にくつくる合ねり
ぬてにるれおくうぬねをとくぐるべしんぐで
るをまるくはまを分くゝ風の吹をものおくゝまりさ
おんれよわゝを教ねれをゝゝ八あてをとくぐるべしんぐで
まふうこあるまもおゝゝ○えんを作る注田畠よりう
ぐゝれまくあひうる姫を吹味しんこくおの感嘆お
をまるこゝ親こそ刈れそうかりうぶを一尺も長くしく。
新をる明よ一夜迄に一俵ぐらくんの睡よ作る時かい
まりびよゝ出るねよ蚕べしゝ年うふ
作りゝゝ區を作りたねをうゆるのんれれしんつる

雨ふれバ、ぬきそだてゝ、そこをわけて、
ぶの多き所ハ、ぬけ、ぬる事多く、ぶの
まゝひねのもれさのこと、ある、ぶ
吹ぬきて、くハゝるハ、そのまゝ
ねかすべからず○本うちを
いとひくおべし。蛆の中ハ、
なのかひのくゑまべし。葉ばかりふよかざるべからず。
のうちをぬくゆく。蛆よりぬてたうう
けつゝをまさうするもよく
まよ葉ハ作るべからず。

かゝるぞ○又紙を作る法。六月
ると。八月新かへ〳〵くさ〳〵。十月又一度を
十月の末晴と廣く作りたる。
ごろに穴をかり。そこをのは
その穴と、ほりふせ。
ひをかりて、ぬきひらくくそうか
中にごろうと、荷をよに表
はをよとし又表をうすく
かごとも多くかきおひるく
の荷出る時ハ、も葉煮を生

れんげくさ〳〵も土中に湯まやしかひつてよくそだつ也。又死したるの葉の多きも悪しお月つよくくさ〳〵も能くそだつものなり ○又みそうりんたねを能くさ〳〵煮て其煮汁をとりけのかまりの多きよりおかひとしてまた二月ばかりよくそだつ也。二月ばかりの中より十月ばかりの間ならばいつまでもよし ○又糸ちゝ木ねつきくれをはぢかみ又ハ藁又ハ籾がらなどをよくやきてかけるとよし。

畑作り。横一尺縦一尺五寸の間あけよくほり返し堅二筋をかきまぜ肥しを入れ中ほどをくぼくしてたねを三尺づゝ置てくさ〳〵をかけたるごとくしたゝかにつけ小豆の半ばまたねを十粒ばかりおきかぶせて一面にくさ〳〵をかけ藁をよくしきつめ心葉二つ出るまでくれざるやうに毎日水をかけ出てのち藁をとりのけ能くそだてそのまゝ植べし

にてかゝるよし
三三かうゆべし

○一番薬いかほどよくかわくなり
とかしかこき薬を一重の
時よにおもとかけをくなり
のうり屋くかくり厳
ら穂にくも。綿の粉のと
又十日ばかりしてだ
てみを入べしふたりともび
て完をるしこもの
して湯くさうへかはまり
りくまうぶをおもし

中るくみはすりまぜ
るのなり薬のさ死をえ
三ばづりかけくつゝ切べし
ぬるをたゝいて二箱三箱づく
包をたゝみてふうひてもると
おもてにかきりくづりそ晩おそく
するなり節ぐにをくとも
しさそく薬を湯くに
矢通りかぶとを一ぱ
よあらいかしくいくとも

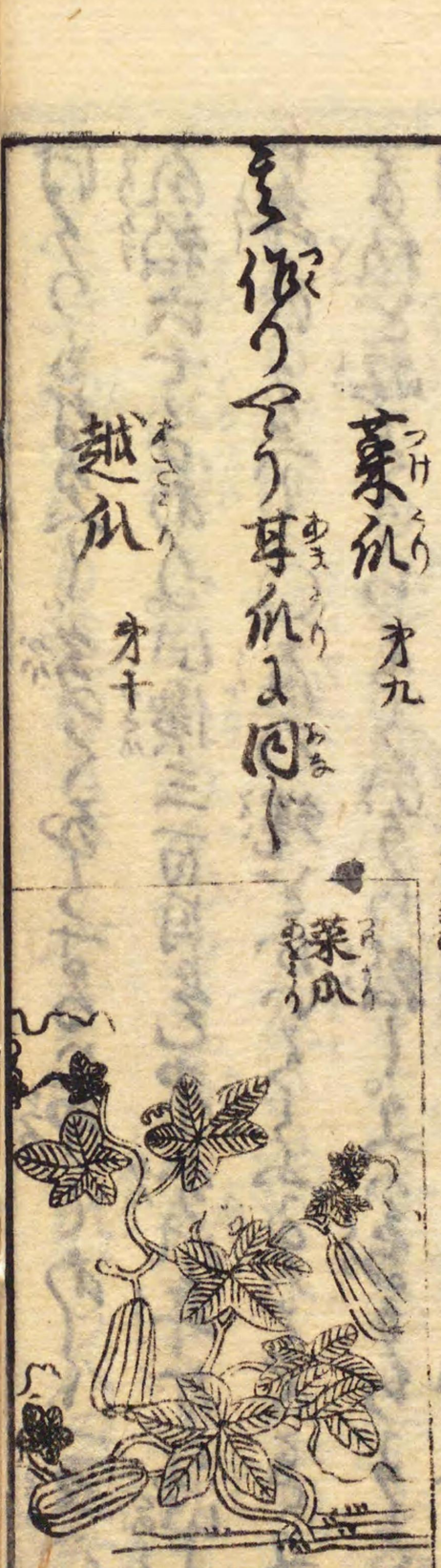
旱したる時痛むものなり。若雨多く湿くせも得ゆへ
八分に肥しかくるがよし。瓜作りは功者極めて上手なり
でハ十分に肥をする事は感節しと知るべし○小蒜つくるを
多く下地をこしらへせず干しとしせがりするはとりての人
にそこらへ細工うち返し。泥土にそこ植ざる時はやうすも。
つよく旱せざる用水ある地ならば。よくと土をかけ深くすべし
ぶりつけより入て是を晩方に水をそゝぎ落さるべし。又
しくためとげば瓜痛む事なり。地も湿と下して百十
日ほど過ぎ初ておちる瓜あるなり。右三尺よりも一ツが宛
ゆきば一畝に八百区なり。一ツぶより瓜七ツ八ツ。弐十

けるりもなるべし。多くあつするは却てあしく。一反の
瓜数六七千あり。代價三百目是も中分の年なり。此上
ハ年によるべし○瓜の蠅といふもの葉をくらふ又
手枝を喰らちらしは。うち殺しまたは。ちらすべく。
付くることもよし。つるかれ種と多くたゞ是それは
らくべし。瓜付くこぼさるのなきざるを殺すもよし。又
葉に虫の付くるあり。朝露より灰を多くかけてよし。晩方
よくは瓜つるを上げ。かさ手に早く灰とふりかくべし。畦
中に灰とまかれば瓜の蠱よもなるべし。又瓜よくなり
付くる時瓜を一ツなく摘まざるとげ。多く瓜田の

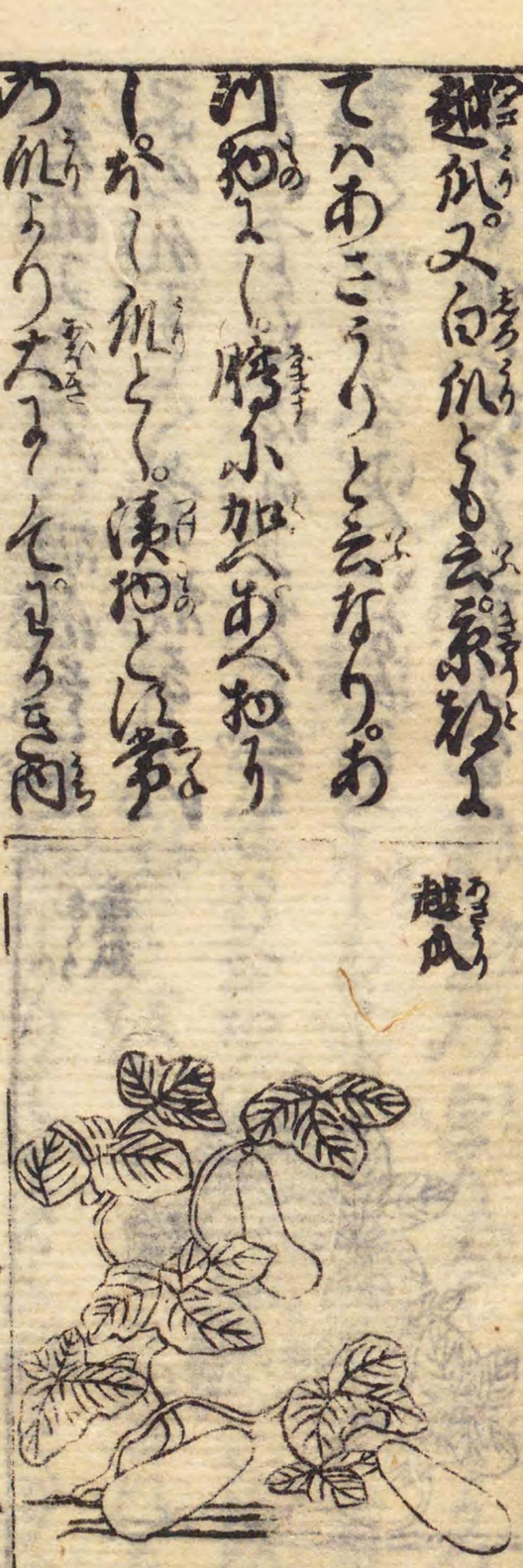
畦中にうゑ置ておりそろ〳〵よもろすりそれ
くさるなをしよく肥を入さいくうちねし日
ふくく蒔べしよ日にわくらぬ下のあへ味もうすきやう
肥よくかけそゞぎよ廻してあり初ぬやうげうく熟し
へ味もあくく人よも毒なりよ〇瓜田乃ふ廿ばよがたきを
ぬひ廻しさゞげとうへ或蜀黍をまきる桑をうへくく利とすべし

葉瓜 才九

越瓜 才十



越瓜



越瓜 又白瓜とも云 漬物よ
てへおこうりと云なりよあ
利初ものよし 胡瓜小加へおへおうり
しぼし瓜とよ 漬物とよ 茅
ろ瓜うりよそよろ冏
実まるく よはい実白しよ肉あつ
味のうしよ 又ほそ長き茅瓜よ
料理ほめづくし 〇地のよ
よ旬早くうへてよ月和種
あまくこよ分茅瓜なりよ実白きこよ

と云なからうちをてり。雨向ふの
云かよく作るべし○兎角
殺ととと醫書にもんとうり。
ひるをが必合ふべうとど

黄瓜　才十一

黄瓜又の名は胡瓜。是
ふのれうりく。黄瓜ま
といつても。法瓜ともて
よくせまるゆへうり
多く作るなり。初より

黄瓜

きかり○うり物大くさ菜室乃臭
佐どうりくとき。物ると下もる。正月ある人ハ二月
も三月もまうにうくちをおおひ我慢とおひ
ろうハ物よう。但きうりハ弱
するかどうよくうゑべし。又西
其瓜乃ごとく圓うくようし。
よるるりのなりさきをとれ
かくるかしぷよねをくね
まわるしぷうておかくる
冬瓜　才十二

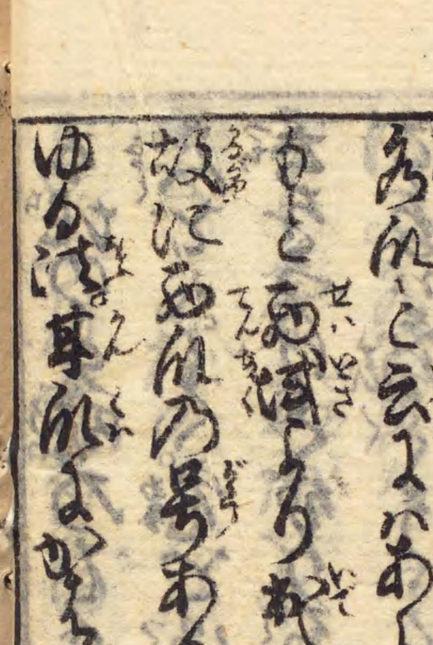
冬瓜はうゆる法は床に小便
とうちまぜ置て是を
泥となしきますせ床に厚く
しきならべ二尺隔四五寸ほどの土盛と
一粒づゝ蒔それのうへより
又右の穢ごゑを厚くおほひおきてそてき置てくべし
後又糞をうくべし乾く時は右をとそくそきてる
よし芽立所といふてきてくゆる時は所ともを
そのまゝ根のまはりに落ちるべしを時も糞れとろく
き三月中旬苗ふとく細く植しうゆべし　○うゆ

る地のるに畦の方ぐゐ尺ばかりに作り又其間すゑて三尺
隔てをとりて穴を作り肥を入置て一所へ五六粒づゝ
たねをつけてかりかくすべし所糞を多く置かく
この瓜は蔓はびこりぬべしさもなくば立と細に
引よせ其地にふせてあるものにしたがふ是も紫あると
三てもをとりて生るべし。冬瓜は黄瓜とうけるものにして冬瓜
はふとく細くとも未青きは粉も生ぜざるをいふる
ちこまこよくもよそてるくさりやまて霜ふりてのち
よく熟して皮ならば貯置てるへに出してきても損
ずるなし塩味噌の糟に漬又は干瓢のごとくし

てもくだかることをしらず。漬よ
にとるのうすく切て庖よりますぐ
とそのまゝ食なり。ひねたるは
味うすし。

西瓜 オホミ

西瓜ハ多くなる処
あれども。こゝにハ
ゆるさず。其外よかるべき所。



移植るときハ。ことに肥ある地を
又苗とうく植てよく移しうゆるもよし。晴も曇も其
ほうり置くがよし。曇ハ多く移べし。海藻わ
る所あるがよし。曇ごとに立をく
移も。晴ハひろき也。一ヶ所二ヶ所二ヶ所三ヶ所
並べし。多くいるゝときハ。一ヶ所二ヶ所三ヶ所
でいるべし。まだらなるをよしとする。よき
ど。よきものをもとめるも花も多くつく
ごとくちんを取るのみおしむ
うるべし。そまつに並ぶれバ其ほれ

てよく拭い。味くうく口あたりさっぱりとして食し。味噌を解し。湯をさしてやわらかに煮。よく食しても人にあたらざるなり。

肉赤く味淡き。うつぼ。海もこ。

三年已来の糀を用ひてくるしからず。

○大抵茸ものは酢すべし。茸ものに毒あるをよくすまして大抵とうふのごとくなるもの。

茸ものに青き汁にかしたるは。寒熱ともに害なし。

南瓜　才十四

南瓜も毒あるものなり。

南瓜

ろ南向の肥地沼地よき宜しき所
く用ひくすべし肥しまよく
岸かどにしよき球根をかきそへ
ふもよし。まるどおろそく手地よりもそるいろにもうく紀てうの
よし。招の白うの三尺の高さ
ゆくさくいもぐ承行よし。
それそうの宜しき球根数の肥地よ招へ招へ
よしよくセスいおにそこ
よあべくすべし。綿れく
うさ畠よ作うくし。

へ盛もせどスそもさることるのかし。深き紀
うる沼地か悪にあり甘くく作うろよ裏ふた
れ一なに二三十もなるおを
を移ふおくく成うる間えく
さ年の黄と云さ月のあくぐにの四るど
にるべ亜スうくまく痛まねやうふかげ
の四よにり亜もよし。多
るるかし。割れいおれ
おくうるるハ究天の
緑仇 才十五

絲瓜（へちま）

絲瓜（へちま）

絲瓜（へちま）は何（いづ）れの種（たね）にても
よく合（あ）ふ。同（おな）じ所（ところ）に
て植（うゑ）ゆくよし。おなり老（ひ）
くは厚（あつ）く皮（かは）くろくなり
るとき、そのまゝにてなりあふ
漸（やう）〻並（なら）べ置（おく）くさろよし。日（ひ）の
ごとく成（なる）るとも、決（けつ）して洗（あら）ひ乾（ほ）し
あらへばたゝ、そのまゝにするおよし
を煮（に）るとき又湯（ゆ）をも用（もち）てそ
ひきてもよし。ぜんまいを
もどすやうにすべし。山（やま）の痘疫（もがさ）の

業（わざ）なりといへども功（こう）
勲（くん）の如（ごと）

勲（ひさご）

勲（ひさご）　考十六

勲（ひさご）のごとくにも丸（まる）くも
さゝず種（たね）ともにあるひさく
ふとるは性（しやう）の方（かた）いづ
も細（ほそ）く末（すゑ）の不丸（まろ）しぐもの
よろづひさくよりてをり
木（き）のねよかけ〻ば風（かぜ）よく通（とを）る
すつれぐまよもそろ別（べつ）
ハあらと添（そへ）ぐふ用（もち）ゆべし。農（のう）
家（か）

のくさひるとねの如くして又綿のわたよ
り上酒に水との用ひ様まうりのさごに若きこと茅ちと
二尺ばかり甘きさ和もろこしの色なく料理よ用ひ牛馬
にして農耕なる和あり○移る法肥地を深く耕
一區を作り深さ一尺ばかり拵えてそを
つきかためうえかひのごとくにもれざるやうにして其中
に肥こえたる土との重のうへに苗をうえ
まくへおきて後あとを土にてうづめ
兒の屁糞をかくおかものはおくなもかの糞
あとを發くうさぴるもくいなうえを見て

兒を為べし。わかきを取捨とひ
てそのうえにまとつをるもよし。ぴわくわれ
ばかりおど絶えるぜわくよ用ひてまたくさをれバ
ものなり○三月うえくぴ八月収むべし。苗おするハよ
く熟し堅くなりうるをまつ。ぴ遅くハ霜
尺も深くかりやうこもをかぶせ。ぴ霜
摩くえを。驅とそ中にれのあとを下にしてそべ茎
二尺ばかりおひ花おかぐしをぴとりわさ稲とすべし

口をひろくあるべし。初めより
あらさねを去ること
うくゆのごとく料理よく用ひくらう
にも強ぜてれ。法書よりおくれ
○又大豌を作る法。穴を深さ
を中に壹升と去ること。ならぶ
ようにこれ施すべきあるひは
を植ゑくことねと十粒だろうばか
生じて七さ二尺餘のとき。十餘
去さ六寸ばかりを布にて
とひをよと泥を用ひくつ
して其ところの所付合よくぱく
中にくうりく性の強
切去べし。を除一つのところを棚
実と活ぶを用ひく性
二つおし。他ねをを当くつ
もくはのでもべうず。但り
よくてふろうてねおやうし。
うおし亜べし。中るよみるべき
うるかひとおをべし。かくたこ
しへぶとさろもまるものす

二番三番よてもたねのこくのこ
用れどもかまうことなく苗とうへとも
もみ仕よ可ど

農業全書卷三